

寺院

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白江, 佳央里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/40134

7. 寺院

白 江 佳 央 里

1. はじめに
2. 蛸島町の寺院
3. 組織
4. 年中行事
5. 問題点
6. おわりに

1. はじめに

今回の調査実習で初めて訪れることとなった蛸島町は、能登半島の先端にある珠洲市内にあり、海から非常に近いところに位置する地域であった。道路沿いに並ぶ家々は、横幅も高さもほとんど変わらず、どこか可愛らしいこじんまりしたイメージを持たせる。この地域はさほど広くないのだが、寺院がふたつある。実家の近くに寺院がなかったわたしにとっては、新鮮な空間に感じられ、寺院における組織や行事に純粋に興味を持ち、知りたいと思うようになった。

本章では、各寺院の概要から組織、年中行事、現在直面している問題点について述べていき、最後にこの蛸島町において寺院がどういった位置にあるのか、今後のあり方について述べていこうと思う。

これより記述していく内容はすべて、主にふたつの寺院の住職さん（Aさん、中貝蔵、男性、40歳代；Bさん、仲町、男性、60歳代）への聞き取りによるものであることを、ここに述べておく。

2. 蛸島町の寺院

蛸島町には、光行寺と勝安寺という寺院がある。この2つの寺院の概要を記述していく。

2.1 光行寺の概要

まず光行寺の由来から述べていく。

遠い昔、真言宗不空寺の住職であった西順が親鸞聖人の教えに帰依し、名前を光行寺と改め、1555年には現在地である蛸島地区に移転し、草庵を設けて開闢(かいびやく)した。その後、1603年に仏念が本堂を建立して寺基を定め、観濤山第12代門首教如上人から、寺号の公称を許可された。平成14(2002)年には本堂再建事業を発願し、8年をかけて本堂を再建した。

建ってから2~3年がたっている現在の本堂であるが、再建の流れを説明すると、はじめは再建事業の発願をした平成14(2002)年である。この年に新築のための寄付金も募っている。昔は、権力を持っている家が多額の寄付金を納めなければならなかったが、現在では平等になっており、1戸あたり70万を積立金として集めた。平成18(2006)年には、予定の65%が集まったため、その翌年から工事を開始して、平成22(2010)年に完成した。

また、費用を抑えるために柱に使うケヤキを輸出先の中国まで出向いて買ったそうだ。これにより、日本で買うより費用を4割ほど抑えられている。

次に宗派と門徒数などの説明をする。光行寺は真宗大谷派の寺である。檀家は380戸あり、そのうち蛸島にある檀家は300戸と8割近くを占めている。現在、門徒は360人ほどおり、最も多くの門徒がいたのは平成12(2000)年で430人ほどの門徒がいたらしい。金沢にも門徒がいるそうだが、10人ほどしかおらず、全体の10分の1にさえ満たない。

2.2 勝安寺の概要

慶長13(1608)年に慶正によって開創された(『石川県の地名』1991:995)。明治20(1887)年8月21日には類焼に遭っており、明治25(1892)年2月に再建している。再建された勝安寺の前庭にはツツジの名園が見られ、後庭にはよく整備された庭園があったそうだ(永松1947:9、珠洲郡役所編1932:675)。

真宗大谷派の寺院。元は真言宗であったが、慶長13(1608)年に真宗となった(珠洲郡役所編1932:675)。門徒は120人ほどおり、時期は不明確だが、多いときで140人もいたそうだ。門徒は蛸島の人がほとんどを占めているが、なかには三崎の人もいる。正院の人はほぼ日蓮宗であり、門徒にはいないようだ。

3. 組織

3.1 光行寺の組織

門徒を代表して住職を助ける人である門徒総代は民間から8人選出される。また、責任役員は

寺関係者から2人、民間から3人の計5人が選出される。

光行寺の門徒により行われている婦人会も組織されており「愚禿会」と呼ばれている。ここでは住職の奥さんが代表を務めている。年会費は1500円となっており、この組織には希望者のみが参加する。婦人会であるが、女性だけでなく男性も入会できることになっている。しかしながら、会員は年々減少し続けているらしい。

3.2 勝安寺の組織

代表役員は住職が務めている。門徒総代は5人選出され、このうち4人は蛸島から選出される。責任役員は蛸島から1人、三崎から1人の計2人が選出される。この役職は、住職の妻である坊守が中心となっている。さらに、世話方という役職には10人が選出されるのだが、ほとんどが蛸島の人で構成されている。これらの役職はどれも3年任期であるが、ほぼ再選となっており、顔ぶれはあまり変わっていないようだ。

光行寺同様、勝安寺にも昭和37(1962)年から「みどり会」という婦人会が存在していたそうだが、現在は休止中となっている。休止になってしまう前は、毎月9日にお参りをしていたようだ。また、祠堂経の際に行われる御座のときには、みどり会の仏故者法要も行われている。

4. 年中行事

ここでは各寺院の年中行事について記述していく。光行寺に関しては、実際に参加した儀式的記録も記述する。

4.1 光行寺の年中行事

4.1.1 光行寺の年中行事の説明

【2月24日～28日 春勧化（ハルガンケ）】

雪が降っているため、畑仕事や漁ができないので、早く春になってほしいというもの。昔は1か月間していたが、今は5日間となっており、親鸞聖人の命日が28日であることから2月28日が最終日となるようにしている。

日程としては、昼14時から16時半まで本堂で経を唱えたのち、夜19時から21時まで門徒の家を訪れて経を唱えるという流れである。以前は、説教をする門徒家に葬式があった家を選んでいたので、徐々にできる家が減ってきたため、現在では蛸島町の16区分（桜町を除く）を4つの区分に分けおとして、各区分から1軒選出して訪れている。この訪れる家は毎年変わる。

説教を受ける際は仏供米（ブクマイ）1升もしくは500円が求められる。

【8月14日～16日 盂蘭盆会（ウラボンエ）】

お盆に行われるお勤めであり、昼に行われる。お勤めをするのは住職さんの息子や近所の寺の息子で、アルバイトとして頼んでいる。

住職はお盆のお墓参りに訪れた人に経を唱える。この経の内容は特別決まっておらず、光行寺では阿弥陀経のなかの六法段という経を唱えている。浄土真宗では、死者はみな仏になるため死者の供養に経を唱えることはしないという考えがあるが、それでも経を唱えているのは、門徒側が経を唱えることを望むためである。

【8月24日～28日 祠堂経（永代経）】

亡くなった人のために、永久的に説教をするもの。

昼13時半から16時半まで、夜19時から21時まで、どちらも寺院の本堂でお勤め、説教が行われる。説教には外からお坊さんと呼ぶ。以前は2週間ほどやっていたが、現在では5日間となっている。春勧化と同様に親鸞聖人の命日である28日で終わるようにしている。仏供米1升とお布施が求められる。

【11月15日～18日 報恩講】

15日の14時からの速夜から始まり、18日の14時からの結願で終わるというものである。仏供米1升、ろうそく代、ツキナミ、お斎と呼ばれる昼ごはん代1000円が求められる。ツキナミはその家の規模によって払う金額が決まっているお布施で、高いところでは10升（1升=500円）が求められる。しかしその基準は戦前から変わっていない。

4.1.2 光行寺の祠堂経の記録

平成25（2013）年8月25日 祠堂経参加の記録。

〈スケジュール〉

- 13:30 住職による読経。参加者はお焼香をする。
- 14:20 「おみやかし」を集める。
- 14:25 「赤本」を見ながら読経。その後、外部からの坊さんによる説教。
- 15:05 休憩。
- 15:15 再開。
- 15:35 説教終わり。その後、全員で読経。

この日、参加していた地域の人は15人。1人を除いてみんな女性であった。隣に座っていたおばあちゃんによると、この日はトライアスロンが行われていたためいつもより参加者は少なかったようだ。

会場は、写真1でも分かるように畳であるが、椅子が並べられていた。年配の方が多く、時間も短くはないため、参加者のことを配慮して並べているのだろう。さらに、蒸し暑い日であったので、窓は開けられており、扇風機も設置されていた。このように参加者にとって居心地の悪い空間にならないように配慮されていた。

祠堂経が始まる前には、一軒ずつお金を納めているようだ。これはロウソク代として納めており、門徒総代の家や愚禿会は1万円、ほかの家は3千円から5千円を納めていた。写真2で見られるように、名前と納められた金額が記された紙が壁に並べて掲示されていた。納めた順番での掲示ではなく、金額ごとにまとめて掲示されていた。

読経が始まるまでの間、参加者のみなさんは世間話に花を咲かせていた。会話が止まる様子はなく、これだけの人が集まる機会はないのではないかと感じた。

住職が読経を始めると、参加者は手を合わせて「なんまいだ〜(南無阿弥陀仏)」とつぶやいていた。また、お焼香は全員が必ずするものではなく、心ある人が仏様にするものとなっている。するかしないかは自由とはいえ、ほとんどの人がお焼香をしている印象だった。お焼香には100円を出した。お焼香をする順番は決まっておらず、先にしてきた人が席に戻ってから近くにいる人に「あんたもしておいで」というように勧め、次の人が行くという流れであった。私自身も近くに座っていたおばあちゃん方に勧められてお焼香をしてきた。

読経の後に集められた「おみやかし」とは、お経代のこと、1人200円ずつ集められた。この際、門徒総代が参加者を順番にまわっていき、写真3にある、長い柄のついたカゴの中に「おみやかし」を入れてもらっていた。

読経の際に使っていた「赤本」とは、参加者が持っていた経が載っている本のことであり、正式名称は「真宗大谷派勤行集」という。ほぼ全員が持ってきているなかで、持ってきていない人もいたが、その人はすでに経を覚えており、読経の際には暗唱していた。その後の説教は、門前からいらっしゃった坊さんによるものであった。内容としては、「いつの時代においても「老」「病」「死」は変わらないものだが、そういった中で、私たちはどのように生きていこうか。このことを考える上で、親鸞聖人はどのように考えていたのか見てみよう」というもので、実際に「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人のおおせをかぶりに信ずるほかに子細なくなり」という親鸞聖人のお言葉を取り上げて、解説を受けながら理解を深めていった。方言混じりの話し方であるため親近感を持つことができ、さらに写真4で見られるように、黒板を使いながら説明して下さったため非常に分かりやすいものであった。途中の休憩ではお

説教代として200円回収された。こちらも、「おみやかし」と同様に門徒総代がカゴを持って回収してまわっていた。



写真1 (2013年8月25日 筆者撮影)



写真2 (2013年8月25日 筆者撮影)

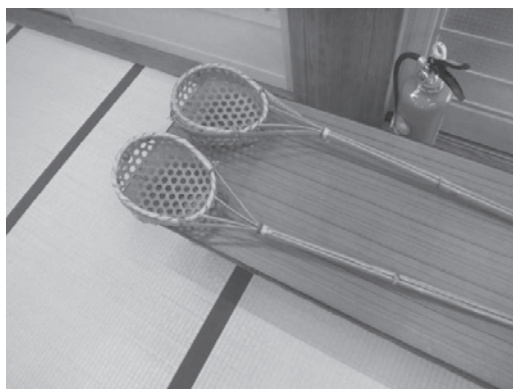


写真3 (2013年8月25日 筆者撮影)



写真4 (2013年8月25日 筆者撮影)

祠堂経の最後に全員でした読経でも「赤本」に載っている経を読んだのだが、この経に関してはほぼ全員が経を覚えており、暗唱していた。ほかの行事の際にも、最後に全員で読経している経なのだろうと感じた。

全体の雰囲気としては、想像していたよりもずっと穏やかなものであった。読経が始まるまで世間話に花を咲かせたり、お説教の際は隣の人と顔を見合わせて笑ったりなど、ゆったりした印象を受けた。ただ、若者が参加することは珍しいようで、参加していたおばあちゃんにも門前の坊さんにも声をかけられた。蛸島町ではもちろん、おそらく門前でも、若者が参加していることはそうそうないのだろう。

4.2 勝安寺の年中行事

【1月1日～3日 衆正会】

本堂には上がらずお金を投げたりして、手を合わせていく。鐘をついたりする人や、年配の方では本堂に上がってお参りをする人もいる。向かいの神社へ初もうでに行った流れでそのまま来る人が多いそうだ。

【1月～3月 御取越 (オトリコシ)】

報恩講が終わって年が明けてから、住職が各家庭を回ってお勤めをする。回るペースも時期も特に決まっていないが、勝安寺では100軒を1月から3月までかけてまわるそうだ。この時期、特に門徒から食事を出してもらうことはない。

【3月5日～10日 祠堂経】

祠堂経とは、永きにわたって亡くなった方のお勤めをするというもので、永代供養に近いもの。門徒の命日はばらばらで1日から31日までであるため、本来は1か月行うものであるが、現在は布教師へのお礼が負担になるので1か月も行うのは不可能となってしまった。昼は70歳代ほどの年配の方が多いが、夜になると50～60歳代の少し若い層の人たちも参加している。説教の内容が面白いので、昔は娯楽の場でもあった。

以前は8日間やっていたが現在は6日間となっている。14時に寺院に集まって30分ほどお勤めをしたのち、他の寺院から呼んだ布教師に30分ほど説教をしてもらう。19時には、「御座」といって門徒の家に出向いて説教する。御座は6日間違う家に出向くのだが、前年の祠堂経以降に不幸があった家を優先し、さらに同じ地区に固まらないように選んでいる。御座をする家には20～30人ほど門徒が集まるが、以前は40～50人ほど集まることもあり、大きな家でしかできなかった。各家に御座の場所提供を頼むのは門徒の世話方の役目となっている。以前は御座の家で布教師さんの食事の用意をしてもらっていたが、現在はしてもらっていない。

【8月13日～16日 お盆】

お墓参りがメインとなっており、寺院の本堂で何かをやることはない。住職と息子の2人でお墓をまわって経を読んでいるが、手が足りている他の寺の人にアルバイトで来てもらうこともあった。勝安寺の門徒のお墓は、境内と蛸島内の飛び地、三崎の山や門徒の家にあるため、13日に三崎、14、15日に蛸島、16日に境内という流れでお墓をまわるというやり方で3、40年やってきた。

読む経は決まっており、勝安寺では阿弥陀経の3分の2ほどを読んでいる。昔は全部読んでい

だが、時間がかかることと時期的に暑くて大変だということがあったため、今の形にしている。

お盆の前の日曜日には、門徒全員に来てもらい、お墓まわりの草むしりなどをしている。各お墓を洗うのは個人でやるもので、お盆の前にやっておく。当日は花とろうそく、線香をあげて、住職にお勤めをしてもらう。ほとんどの人はお墓参りにくるとお勤めをしてもらうが、帰省中の子供など、お勤めをせずに手を合わせるだけの人もいる。山など遠くにお墓がある人は、お墓ではなく家でのお勤めを希望することもある。

【12月3日～7日 報恩講】

以前は1週間行っていた。3日の昼14時から2席のお勤めと外から布教師を呼んでの説教を行う。4日以降になると、朝9時からも行っている。布教師は富山や小松から呼んだりもする。5日間同じ人が話すので大変。5日には御傳鈔（ゴデンショウ）という親鸞聖人の生涯の話を読むのだが、読み終わった後に特別解説などはしない。7日の朝10時から、オサライといって今までの説教のまとめをするが、これはすべての寺院が行っているわけではない。5～7日は説教の後に「お齋」とよばれる料理がふるまわれる。また、オサライの後、「精神落とし」「まな板返し」と呼ばれる宴会をする寺もあるが、勝安寺では行っていない。

【春、秋 彼岸】

かつては春、秋ともにおはぎを寺で作ってお供えし、その後にそれを下げて、寺に来た人たちで食べていた。また、おはぎを目当てに子供たちも多く参加していたが、現在ではおはぎをつくることもなくなった。昼13時半くらいからお参りをすることが普通であったが、近年では彼岸だからといって特別なことをする人は少なくなった。

4.3 ふたつの寺院の年中行事の共通点および異なる点

ふたつの寺院の年中行事を記述したところで、共通点や異なる点などを見ていく。

共通点として挙げられることは、どちらも盂蘭盆会（お盆）の際に息子やほかの寺院の人をアルバイトとして雇っていることである。どちらの寺院も盂蘭盆会についての聞き取りの中で出てきた内容であることから、どちらの寺院もこの時期が最も忙しく、人手不足となってしまうことが考えられる。

異なる点としては、日程のことが挙げられる。報恩講の日程のように数日しか変わらないものは寺院によってずれているだけのように思われるが、祠堂経に関しては季節大きく異なっているのである。光行寺の祠堂経は8月24日から28日、一方勝安寺の祠堂経は3月5日から10日までとなっている。真宗の寺院では、春や秋といった気候のよい時期を選んで祠堂経が行われている

ようだ（浄慶寺 HP より）。このことから光行寺は秋に入る時期に、勝安寺は春に行っているという大きな時期の差について理解することができる。

また、勝安寺では人が集まり、おはぎを食べたりしていたということから、光行寺からこういうエピソードが出てこなかっただけかもしれないが、勝安寺のほうがコミュニティ空間という色が強かったのではないかと思われる。

5. 問題点

聞き取りをしていくなかで光行寺と勝安寺の両方に共通している問題点を見つけたので、ここではその問題点を取り上げ、記述していく。

共通する問題点というのは、無縁墓の増加のことである。無縁墓というのは、掃除やお供えなどの管理をする人がいない墓のことである。

現状を説明すると、光行寺では、線香が立てられておらず花も供えられていない墓が共同墓地に 63 基ある。そのうち、数年間お供え物や線香がなく、無縁墓だとはっきり分かるものは 55 基もある。なかには、北前船が活動していたころのものもあるようだ。これらの放置されている墓のお骨を 1 つに集めて、供養塔を作るという計画も上がっている。

続いて勝安寺の無縁墓について述べていく。数ははっきりと把握していないそうだが、確実に数は増えてきている。無縁墓の撤去について考えたこともあるそうだが、撤去には読売新聞、朝日新聞、毎日新聞の 3 社に 3 年間広告を載せなければいけなくなってしまうため、そのままにしているようだ。数多くある無縁墓のなかには、江戸時代や明治時代につくられて、文字が読めなくなってしまうものや、もはや墓なのかどうか判別できなくなっているものもある。また、珠洲市にはない苗字の墓もあり、それは戦時中に米軍に沈められた日本の潜水艦の乗組員の墓ではないかと考えられている。

こういった状況になった背景には、若者の都会への流出が大きく関係している。もともと少子高齢化が進んでおり、若者が少ないことに加えて、働き口がないことから、若者は都会に行かざるをえなくなってしまう。都会で働き始めて、その土地で家庭を持ち、定年まで働くと考え、甥島町に戻ってくる可能性はかなり低くなると考えられる。そうして放置される墓が多くなっていくのだろう。

6. おわりに

ここまで光行寺と勝安寺、ふたつの寺院について述べてきたが、このふたつの寺院はどのよう

な役割を担っているか考えてみようと思う。上で述べているように、春や秋に子供達が集まっておはぎを食べたり、説教のときには内容が面白いからという理由で人がたくさん集まったりと、昔の寺院という空間は、地域の人々が集まるコミュニティ空間であった。その機能は、現在も少なからず残っているように思われる。光行寺の祠堂経に参加した際、参加者は高齢者ばかりであったが、嬉しそうに隣の席の人と話している様子が多く見られた。このことからコミュニティ空間としての機能はまだ残っていると、私は現地で感じた。

対して宗教的な面から見てみると、寺院の機能は弱くなっていると思われる。機能が昔から変わらず維持されているなら、無縁墓は増えないと考えられるからだ。背景に少子高齢化や働き口不足があるとはいえ、特定の寺院に宗教的機能を求める人が少なくなっている可能性があるといえる。

最後に、今回訪れた蛸島町および関わったすべての人々に感謝いたします。本当にありがとうございました。